

小林 良 正

『アジア的生産様式研究』

大月書店 1970.3 182 ページ

塩 沢 君 夫

『アジア的生産様式論』

御茶の水書房 1970.11 249 ページ

周知の通り「アジア的生産様式」に関する研究と論争が、目下国際的な規模で展開されており、その関係文献はすでに夥しい数にのぼっている。この研究と論争の意義はおよそ次のような点にあるものと考えられる。第1に、世界史の展開の理論的認識を、歴史の現段階の立場から再検討することであり、第2に、そのことを通して社会科学の理論や概念を吟味し、その認識を深めることである。

周知のように戦前に行われた論争の際には、「アジア的生産様式」は奴隷制ないし封建制のアジア的変種とみなされ、それを独自の生産様式とみなす見解は公式的には否定された。しかし西欧以外の諸地域の実証的研究も進み、その歴史研究が深化するにつれて、原始共同社会—奴隷制—封建制—資本主義という序列法則の普遍化的把握によっては処理できない諸問題が提起され、「アジア的生産様式」の復位が提唱されるに至ったのである。

もち論4段階説1元論をなお堅持している研究者も存在しないわけではなく、また「アジア的生産様式」の復位を提唱する者の間でもその見解は多様に分岐している。この概念の妥当領域が世界的に普遍的か、西欧以外の一定地域に限定されるかは別として、それら諸見解は、およそ次のような型に分類できるだろう。(1)「アジア的生産様式」は奴隷制的生産様式に先立つ1つの独自の社会構成体である。(2) ときには長期間にわたり安定化する、原始共同社会の最終段階であり、階級社会への過渡期である。(3) ヨーロッパとは異なる独自の発展類型そのものである。

さてこの度わが国で相ついで刊行された小林・塩沢両氏の著書は、いずれも「アジア的生産様式」の復位を提唱されている点で共通するが、上記の諸見解のうち小林氏は(2)と(3)とを統合した見解を示され、塩沢氏は(1)の見解に立たれている。しかし両氏はいずれも、過渡段階にせよ、独自の社会構成体にせよ、「アジア的生産様式」を世界的に普遍的な現象と捉えられる点で共通する。

小林氏の著作は、主に「アジア的生産様式」に関連するマルクスとエンゲルスの諸文献の殆んど余すところのない¹⁾、しかもきわめて綿密でかつ示唆に富む研究であるが、この文献研究から、氏は過渡段階説を次のように提唱される。第1に、「アジア的生産様式」は、マルクスの言う「農耕共同体」の社会であるが、それは崩壊過程にある原始共同体の「最後の段階」に当り、エンゲルスの言う「未開時代の上段」に位置する。従って、階級社会への過渡期ではあるが、1つの独自の社会構成体を形成しない。それ故氏は「アジア的生産様式」に代って「初期(あるいは早期ないし未発達)階級社会」という呼称を提唱される。第2に、すでに支配・隷属関係の胚種形態、階級分裂の端初形態が、「全般的奴隷制」と称せられる臣従制と、未展開の奴隷制的ウクラードとして存在しているが、本来の階級社会とは言い難い。第3に、過渡期の社会の本姓として、マルクスが農耕共同体の性格として指摘した共同体所有と私的所有との二元性のほかに、未展開の奴隷制的ウクラードと、「全般的奴隷制」と称せられる臣従制という早期封建的なウクラードと、解体しつつある原始共同体という3つのウクラードが併存する。第4に、従ってこの社会には、奴隷制に展開する要因と封建制に展開する要因とが、未分化のまま包含されており、その結果、「アジア的生産様式」の解体には2つの道が可能である。つまり奴隷制的ウクラードの支配に帰着する西欧型の展開(奴隷制—封建制—資本主義)の道と、封建的ウクラードが奴隷制的ウクラードを圧倒してゆき、直接に封建制への展開を辿る非西欧型の展開の道とがそれである。この非西欧型の場合には、奴隷制的ウクラードと共に原始共同体的(家父長制的)ウクラードさえ長く残存して、「アジア的封建制」の展開となるか(アジアの場合)、再版農奴制の展開やスラヴ共同体の強固な残存を示す場合もある(東ヨーロッパ)。

以上の小林氏の見解に対して、塩沢氏は、アジア的生産様式を奴隷制的生産様式に先行する独自の社会構成体とされ、理論的に普遍的な5段階説を提唱される。氏の著作は、まず戦前戦後の論争史を批判的に検討され(第

1) ただしマルクスの「コヴァレフスキー・ノート」についてはふれられていない。そのうち、アルジェリアにおける土地関係に関する部分と、John B. Phear: *The Aryan village in India and Ceylon*. London, 1880. のマルクスの読書ノートとが、Centre d'Etudes et de Recherches Marxistiques: *Sur les sociétés précapitalistes. Textes choisis de Marx, Engels, Lénine*. Paris, 1970. に収められていることを指摘しておく。「コヴァレフスキー・ノート」の邦訳が期待される。

1章), ついでマルクスにおける「アジア的生産様式」概念の成立とその発展の過程を文献史的にフォローされ(第2章), ついで「アジア的生産様式」の生成・発展・没落のロゴスを、『資本論』の論理構造をモデルとして展開するという課題に取組まれ(第3章), 最後に補論として「アジア的生産様式」の社会における階級分化の理論を, 日本の8世紀の戸籍・計帳残簡によって実証しようとしている(第4章)。氏の中心テーマは第3章にあり, 「アジア的生産様式」の論理構造の究明という外国の諸文献でも未開拓な領域への「試論」を展開されている。

氏は、『資本論』の端緒形態である「商品」に対応する細胞を, 基本的経営単位としての「アジア的小共同体」に求め, 「貨幣」に対応するものは, 小共同体が相互にとり結ぶ関係——共同体間分業に基づく交換, 河川の灌漑や土木工事などの共同労働——であり, 「資本」に対応するものを, 小共同体相互の上位・下位の支配・隷属関係であるとする。

小林氏とは異なって, 塩沢氏は, この段階ですでに階級分化が, とくに征服共同体内部の家族間の階級分化を通じて確立することを強調される, この階級分化を促進する要因としてあげられるのは次の2つの事情である。第1に「ヘレディウム」(宅地と庭畑地)と動産の私的所有の集積と喪失, 第2に成員権をもった共同体成員の集積(大家族化)を媒介とする耕地被分配権の集積という形での経営耕地規模の拡大と縮小である。かくして「ヘレディウム」を大量に集積し, 傑出した家族数を有する少数の巨大家族(223ページ)が, 共同体首長の地位を固定的に掌握し, 社会的機能を執行する公僕から, 共同体の支配者に転化し, 更に次の事情を通じて, 生産手段の所有関係を基礎とする剰余労働の収奪者に転化するというのである。その事情とは, 塩沢氏によれば, 第1に, 首長による共同体の全「ヘレディウム」の独占的所有と, それの成員への貸与による剰余労働の収奪のことであり, 第2に, 共同体首長が, 共同体的所有の体現者として, 観念上共同体の土地の「唯一最高の所有者」となる(アジア的専制君主の原型)ことに基づく剰余労働の収奪のことである。

以上のような剰余労働の収奪を知った先進的な共同体が, 外部の共同体に対して剰余労働の収奪を求めて征服・支配を行い, その支配権を拡大する過程から, 共同体による共同体の支配の重層的な積重ねとして, 専制国家が形成され, 「アジア的生産様式」が確立するというのが塩沢氏の見解である。

「アジア的生産様式」の解体のプロセスについては, 塩沢氏は次のような見解を示されている。まず第1に生産力の発展による経営規模の縮小と, 第2に耕地への私有の拡大とによって, 家族が基本的経営主体として自立化する過程で, アジア的共同体が崩壊し, 基本的経営として独立した家族相互間に, まず古典古代的共同体が形成され, ついでそのなかから階級分化の過程で奴隷が発生するというのである。

以上の塩沢氏の見解は小林氏のそれと次の諸点で異なっている。第1に, 「アジア的生産様式」は1つの独自の社会構成体か否かという点, 第2に1つの階級社会とみなしうるか否かという点, 第3に小林氏が未展開にせよ奴隷制的ウクラードを「アジア的生産様式」の必然的な構成要素と考えられるのに対し, 塩沢氏は奴隷の存在を内的必然性をもたないものとして否定される点, 第4に「アジア的生産様式」の崩壊は, 奴隷制生産様式にのみ帰着するのか, それとも同時に封建制への道にも通ずるのかという, その解体の問題である。以下順次にこれらの問題を検討する。

まず第1の, 独自の社会構成体か否かの問題については, 小林氏の過渡段階説の根拠が, マルクスの「ザスリッチの書簡への回答草案」にあることは疑いない。マルクスが, そこで, 「農耕共同体の時期は, 共同所有から私的所有への過渡期として, 第1次的構成から第2次的構成への過渡期として現われる」(マルクス・エンゲルス全集, 邦訳, 第19巻391ページ)と述べているのがそれである。ところでこの第1次構成とか第2次的構成というのは, 資本主義社会とか封建制社会を意味するいわゆる社会構成体でないことはいうまでもない。第1次構成とはなるほど共同体的所有の支配する「社会の原始的な構成」であるが, これについてマルクスは次のように述べている。「これらの原始的共同社会をすべて同列におくならば, 一つの誤りをおかすことになる。地質学上の地層の場合と同じように, これらの歴史的構成にも, 第1次, 第2次, 第3次というような型の全系列が存在する」(同上388ページ)と。また第2次的構成とは, 共同体的所有の死滅から資本主義の発生にいたる「1系列の継起的な経済的革命および発展をふくむ長々しい中間期」(同上400ページ)のことであり, 従ってそれは, 西ヨーロッパにおける奴隷制・封建制・資本主義という社会構成体を, 相継起する型としてもつ1系列のことである。従って第3次構成とは「原始的な型の所有のより高次な形態, すなわち〈集团的〉共産主義的所有」(同上401ページ)のことであって, この段階に至れば「資本主

義制度がもはや「原始的」構成にすぎなくなる」(同上)。要するにこの場合の構成とは全人類史を共同所有の否定の否定という観点から見たものにほかならない。従って、第2次的構成が西ヨーロッパにおいて奴隷制・封建制・資本主義という3つの生産様式を型として内包する1系列であるように、第1次的構成を、原始共産主義社会と「アジア的・生産様式」という少なくとも2つの生産様式を型としてもつ1系列と想定することは理論的に可能である。

より実質的にみれば、問題は、マルクスが古典古代的共同体とゲルマン的共同体とを、それぞれ奴隷制と封建制との基礎として段階的に区別したように、「アジア的・生産様式」の基礎をなす農耕共同体を、それに先行する「血縁共同体」から段階的に区別するに足る質的差異が存在するか否かである。マルクスは「さまざまな原始共同体社会の衰退の歴史を書くことは今後にもたなければならぬ」(同上、388ページ)としたけれども、少なくとも動産をも共同所有の対象とし共同体単位の共同労働を行った「血縁共同体」と、土地のみを共同所有の対象とし、耕地を共同体成員の分割労働に委ねた農耕共同体との質的段階的な差異を疑うことはできない。その意味で、農耕共同体を基礎とする社会は、第1次構成系列中の1つの型として、1つの独自の生産様式を構成するものと考えられる。

この問題は、「アジア的・生産様式」を1つの階級社会とみなしうるか否かという、戦前の論争で最大の混乱をひきおこした第2の問題に関係する。「アジア的・生産様式」がその基本的ウクラードとして持つ「全般的奴隷制」が、臣従制と貢納賦役制を意味することについて、小林・塩沢両氏の見解は一致するし、私も同意見である。これを階級関係として萌芽的なものとみるか、本来的なものと評価するかが意見の分れるところであるが、この点については、マルクスが農奴制と奴隷制と政治的隷属とを、経済外的強制の、従って搾取の3つの異なった形態とみなし(マルクス・エンゲルス全集、邦訳、第26巻Ⅲ 517—518ページ)、またエンゲルスが、「太守^{サトラップ}やパシヤはそれ自体で搾取の主要な東洋的形態を具現する」と述べ、1つの階級社会とみなしていたことを指摘するにとどめよう。

この「全般的奴隷制」とは別に、小林氏は、副次的なウクラードとして、未展開ではあれ奴隷が存在すると考えられるのに対して、塩沢氏は奴隷の発生を本質上認められない。これが第3の問題点である。この点に関して、「アジア的」国家が展開した場合に、「全般的奴隷制」が次のような側面をもつことを注意したい。つまり君主

が、共同体的土地所有の体现者として、共同体成員の基本的な生存条件である土地を掌握していることから、かれが共同体成員の「生存の所有者」としても現われるということである。このことは、例えば17世紀ラオスの国家において、君主が「生存の所有者」を意味する Cao Sivit という称号を有したことに示される。その際君主によって土地の占有を認められた者は、自己の生存について君主に債務を負う者と観念され、その代償として貢納と賦役とが行われることになる。その際、たとえ賦役を行っても貢納を行わなければ、土地の占有権を失って奴隷となる。このような事態はすでに14世紀前半以前にも看取された²⁾。小林氏が指摘される奴隷の存在形態は、主に捕虜奴隷と購入奴隷という外来的なものであるが、その他になお動産および土地占有権の貸借関係から債務奴隷が発生することは多くの文献が指摘している。後述のように私的所有の対象である「ヘレディウム」の貸借関係の存在を強調する塩沢氏が、それに伴う奴隷の発生を認められないのは理解し難い。とはいえ、これらの奴隷は売買された場合も稀にはあったが、社会的生産の系統的な基礎とはならず、買戻し可能な不完全所有の対象であり、そこにこの社会を奴隷制社会とみなしえない根拠がある。

さて第4の問題は「アジア的・生産様式」の解体のプロセスの問題である。この点でまず塩沢氏が、私的所有としての「ヘレディウム」の存在を、「アジア的・生産様式」のダイナミックスのいわば1つの原動力として極めて重視されていることが問題である。ところが、既にみたように、塩沢氏の場合、この「ヘレディウム」問題は、有力家族によるその貸借関係を媒介とする集積・集中の問題として、「アジア的・生産様式」の崩壊ではなく、むしろその形成・確立の過程に位置づけられている。その場合、農耕共同体の本質的契機として、当初から「ヘレディウム」私有の存在が想定されている。従って「アジア的・生産様式」の形成過程は、同時に農耕共同体からの、私的所有たる「ヘレディウム」の有力家族による不断の収奪過程となる。これに反してマルクスの場合には、「ヘレディウム」の私的所有は、家屋の私有、耕地の分割用益、果実の私的領有と並んで、農耕共同体のなかの「個人性の発展を可能にする」(同上、390ページ)契機であり、その意味で共同体を崩壊させる契機である。さ

2) Keo Manivanna: "Aspects socio-économiques du Laos Médiéval.", Centre d'Etudes et de Recherches Marxistiques: *Sur le «Mode de production asiatique»*, Paris, 1969. p. 311, p. 319.

らにマルクスによれば、「家畜の形での富に始まる動産的富の漸次的蓄積は、……経済的および社会的平等の解体者として作用し、それが租税の圧迫とともに、共同体の内部に利害の衝突を惹起さすのであり、この衝突が耕地の私的所有への転化をひきおこすという。つまり「ヘレディウム」の私的所有は、私的な家屋などと共に、共同体内部に生じた「個人性」individualitéの契機であり、他方、平等の破壊、支配・隷属関係の発生は、むしろ動産的富の蓄積をめぐって展開する。その蓄積をめぐる利害の衝突のなかから、「個人性」の契機が耕地へと拡大していく。これがマルクスの見解であるように思われる。

もともと宅地・菜園の集中・集積ということは不可解に思われるし、その有力家族による独占的集中という塩沢氏の命題からは、「アジア的生産様式」におけるかなりの大私的所有地の成立を結論せざるをえないだろう。これは土地の私的所有の欠如というその基本的性格に反するように思われる。たしかに家屋に附属する菜園は、その外に位置する耕地よりも肥沃で、生産力の高いことは、アフリカの村落共同体に関する研究が明らかにしている³⁾。従って私有への衝動はそこに最も強力に働くであろうが、それだけに貸借関係に供され、集中されるのは、まず菜園ではなく耕地の占有権であろう。そのような貸借関係が存在することも明らかになっている。従って「ヘレディウム」の、有力家族による貸借関係を媒介とする独占的な集積・集中と、それに基づく剰余労働の収奪という塩沢氏の命題は理解しがたい。

そればかりでなく、「ヘレディウム」私有が農耕共同体の当初から存在するものと想定することも疑問である。コサンピは、紀元前6世紀のインドについて、「宅地および菜園の私的所有は、都市と郊外の地域で認められていた事実であった⁴⁾」と述べ、農村地帯でのその存在を否定している。この事実は都市週辺に居住する王侯等の支配者層からまず「ヘレディウム」私有が発生することを示しているように思われる。塩沢氏の論理は、あたかも「ヘレディウム」私有を伴う農耕共同体がまず完成し、しかる後に、有力家族によるこの私的「ヘレディウム」の収奪を伴いつつ「アジア的生産様式」が国家の水準まで完成するかのよう構成されている。つまり「アジア的生産様式」の成立過程は、同時に農耕共同体における

「ヘレディウム」私有の収奪過程となる。その結果農耕共同体内の「ヘレディウム」私有が、塩沢氏の場合、「アジア的生産様式」の解体に及ぼす作用が無視される。

以上の問題は共同体と社会構成体との関係の捉え方の問題である。塩沢氏は両者の関係を発生史的継起的に捉えている。しかし発生史的には、「アジア的生産様式」と農耕共同体とは同時平行的に展開するのであり、「ヘレディウム」の私有化は、むしろその確立期から崩壊に至る過程に出現し展開するのではないか。マルクスの『先行する諸形態』における共同体と社会構成体との関係の論理は、決して単に発生史的なものでなく、論理的なものであろう。この問題は、塩沢氏の奴隷制発生論の理解にもあてはまる。氏はあたかもまず古典古代的共同体が形成され、しかる後に奴隷制へ進展するかのよう叙述されている。

他方、小林氏の「アジア的生産様式」解体の「2つの道」に関する見解は、世界史の現実の展開の理論的説明として妥当な見解であるが、氏の「アジア的生産様式」論は、基本的に言って、一方では「ザスリッチの書簡への回答草案」における農耕共同体論と『先行する諸形態』における「全般的奴隷制」論との接合である。しかし前者の場合には、農耕共同体は土地の共同所有の主体であり、後者の場合にはその占有者にすぎない。この両者を統合する論理を解明することが、つまり「アジア的生産様式」の形成の論理を解明することになる。これは、崩壊過程のよりたち入った解明と共に、今後に残された課題というべきであろう。

【古賀英三郎】

吉川光治

『イギリス金本位制の歴史と理論』

勁草書房 1970.3 238ページ

本書はイギリス金本位制の歴史を丹念にあとづけてその理論を明らかにしようとする。著者は理論は必ず歴史との接点をもち歴史から抽象されたものでなければならぬという立場をとっており、本書においても、イギリス金本位制の歴史の忠実なあとづけから、古典派経済学者のいっていた金本位制の理論を内在的に理解しようとしている。ここに本書の特徴のひとつを見出すことができよう。本書はもともと期日を異にして発表された6つの論稿から成っているが、第1章から第3章までが主

3) G. Sautter: *Les structures agraires en Afrique Tropicale*. Paris, 1968.

4) D. D. Kosambi: *An introduction to the study of Indian history*. Bombay, 1956. p. 145.